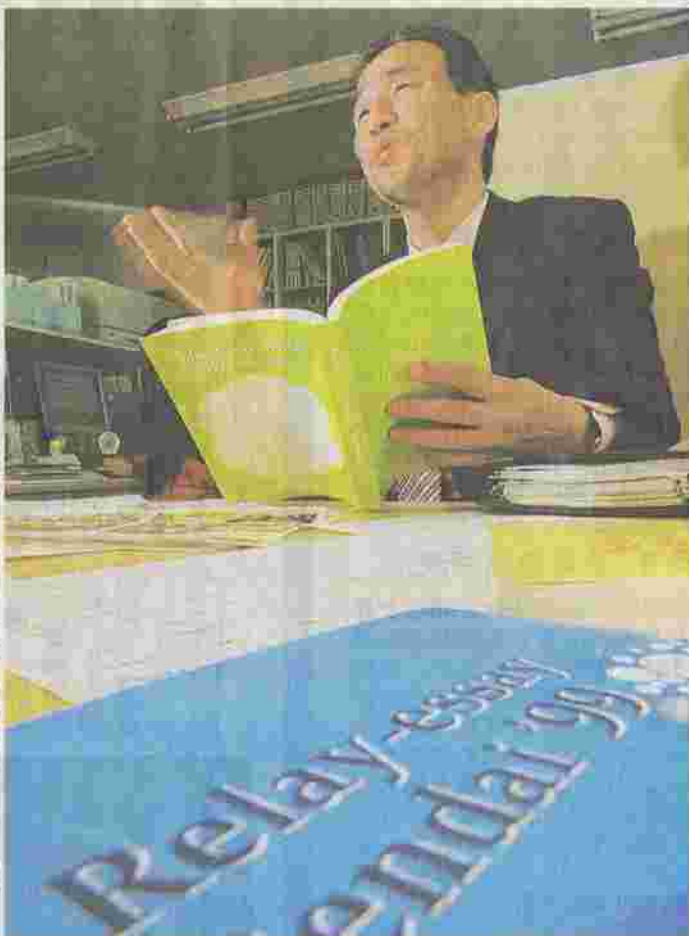


# 河北新報



リレーエッセーを続けているわけは？



はせがわ・よしひろ 仙台市出身。筑波大農林学類卒。青年海外協力隊に参加し2年間、中米コスタリカで植林活動をした後、ギフト用品販売会社社長。宮城県青年海外協力隊を支援する会常任理事、協力隊関連の情報を提供する市民団体「協力隊インフォネット会」代表、仕事に関する相談に乗る「キャリアネットワーク」事務局長。仙台市泉区八乙女の自宅で妻と長男、長女、次女の5人暮らし。

## 逸問 答

三人、三冊目が四十六人と回を重ねるたびに増え、今回は二百一人に膨らんで、一気に二冊作る。六冊で延べ四百四十三人の見知らぬ人たちが市民のエッセイストになって、つながった。

リレーエッセーもほんの思いつきだった。忙しいけど、何かやりたい。高校生のころにやった小説のリレーじゃあ、子どもっぽいかな。エッセーを回すのはどうだろう。エッセーに自分のプロフィールをつけて次の人にリレーしていく。最初に書いて回せばいいから、忙しなくてもできる。

長谷川 嘉宏さん(47) 会社社長

「趣味は、イベントの企画と実行」と言う。早速、仲間と相談したら「面白い」「やろう、やろう」。十年前、仙台市の三人で始めた市民のリレーエッセー集は、これまでに四冊が完成。今、五、六冊目が印刷の真っ最中だ。

費用は参加者が実費を負担する。参加者は一冊目に二十

## 人とつながり 喜び引き出す

知らないような市民。エッセー集には、そんな「ふつうの人」のほっと和む日常の風景、一人暮らしのそこはかとなじみ、寂しさを締め付ける悲しい思い出、思わずほほ笑むいじらしい心の揺れがぎゅー詰まっている。

「筆者に会ってみたい」と本を読んで、そう思ったことがある人も多いはず。この企



画は出版記念パーティーや辛煮会と筆者の交流の場もある。「エッセーには、書いた人の内面が出る。エッセーを読んでいる人同士が会うと初対面なのにすく和やかになって、話題にも事欠かない。心がどんな響き方をするか知っている人たちの触れ合いは、短い時間でも深くつながる。その喜びが四百人を超える。」



「その言葉は」と別の話

「来年、仙台にソウさんを迎えたい。小学校が三十周年を迎えるとき、ソウさんが校庭を歩いたら、子どもたちの一生の思い出になる」と思い

立った。そのときは反対の声が多くできなかったが、四十周年の来年、実現できるといふ。「エッセー集も、自分で出版したら在庫の山、ソウさんもそうですが、夢を分かち合っていて、協力してやればいふんなことができる」

「あまの言わないんですけど」と少しはにかみ、「喜びを引き出すマスターになりたい」。経営する会社のロッカーに、名前の「嘉宏」を使って「喜びを力づくくあげ隊」と書いた紙が控えめに張ってあった。「人が喜びのが好き。喜びを広げる人生を歩みたい」

イベント企画の「趣味」を少し減らそうと考えているが、どうも無理なようだ。報道部・八代 洋伸 写真部・佐々木浩明